

各地で話題の病害虫

ナスミバエ（新称）

学 名： *Bactrocera latifrons* (Hendel)

英 名： solanum fruit fly

本種は、一見するとミカンコミバエ種群に似るが、翅の前縁に有する黒色帯が先端部でふくれて黒色斑を形成すること、腹部にＴ字斑紋を有しないこと等により識別が可能である（詳しい形態については本誌 59 号参照：旧称マレーシアミバエ）。

寄主植物は、トウガラシ、ナス、ピーマン、トマト、イヌホウズキ等のナス科植物の生果実であり、果実に産卵し、ふ化した幼虫の食害により果実が腐敗する。



沖縄県農業試験場 松山隆志氏提供



本種の分布は、東南アジア、台湾、ハワイ等であり、国内では 1984 年、沖縄県と那国島において初めて発見された。初発見後、1986 年から 1998 年まで 13 年間発見されなかったが、1999 年、同島で再度発見された。

本種に対しては、有効な誘引剤が存在しないため、同島内における発生状況の確認は、寄主植物の果実調査により実施された。当時の調査では局地的な発見を確認したのみで、発生を確認するまでには至らなかった。その後も調査を継続した結果、2004 年 3 月に発生が確認されたことから、沖縄県は病害虫発生予察特殊報を発表した。国内における発生は、現在のところ同島に限られており、経済的被害も認められていない。

沖縄県は現在、本種による被害の軽減及び他地域へのまん延を防止するため、植物防疫法に基づく農林水産大臣の指示により、ナスミバエ防除対策を実施しており、寄主植物除去等を行っている。

メボウキ萎凋病（仮称）

英 名： Fusarium wilt and crown rot of sweet basil

病原菌： *Fusarium oxysporum* f.sp. *basilici*

2004 年 5 月、東京都北多摩地域の施設で栽培されていたメボウキ（別名 バジル： *Ocimum basilicum* L.）に、萎凋症状を伴って立枯れる被害が確認された。東京都病害虫防除所などが調査を行った結果、*Fusarium oxysporum* f.sp. *basilici* によるメボウキ萎凋病（仮称）であることが確認された。

本病は、1997 年に初めて群馬県において確認され、また 1999 年沖縄県でも確認された。

病徴は、株全体が萎凋した後、激しい立枯症



東京都農業試験場 竹内純氏提供



状を呈する。地際部の茎に褐色及び黒色の壊疽症状を呈し、根は褐色になり腐敗する。リ病部の茎を切断すると維管束部に褐変症状が見られる。

本病原菌は不完全菌類の一種で、PDA 培地上で白色の菌叢を形成し、培地中に赤紫から紫の色素を産生する。カーネーション葉片寒天培地上で、楕円形の小型分生子と三日月型の大型分生子を形成するほか、菌糸上に円形または楕円形の厚膜胞子を間生、または頂生する。

伝染経路としては、土壌伝染が確認されており、種子伝染の可能性も指摘されている。また、本菌はメボウキのみを侵し、他の作物に対する病原性は確認されていない。

防除対策としては、被害株を根まで含めて掘り上げ、収穫後の植物残さとともに、ほ場外で処分する。発生ほ場の土壌等が伝染源となりうるので、使用農機具等による土壌の移動に注意する。さらに連作を避けることが有効である。